

匠林

SAKABAYASHI

隨筆特集



至高の陶醉



金刀比羅宮蔵 寛政6年(1794年)円山応挙 晩年の作(部分)

220余年の伝統の技が贅をつくした「煌」きらめき

讃岐の金毘羅酒として親しまれてきました金煌が、酒づくりの贅をつくりておくりだした清酒「煌」。金陵の歴史は今をさかのぼること三〇余年の寛政元年。当主八代目であった西野嘉右衛門が、金星羅さんの意ではじめた酒づくりがその第一歩。以来、金刀比羅宮のご神酒として栄誉をうけ、その丹精こめた手づくりの味ゆきは、金毘羅詣の人々から広く親しまれてきました。清酒「煌」のえも言われぬ風味と心へには、金陵の心意気と酒づくりゆずの神髄が細やかに思っています。

真珠玉のべとく搗きあげ

水晶のべとく研ぎすました酒造好適米(山田錦)

清酒「煌」に使っているのは、酒造好適米の中から選ばぬかれた最高の大粒米。これを丹念に高度精白し酒の雑味等の原因となる外層部を削り、磨き、吸水のよい、粟粒よりや大きい、玄米のわずから割ほの、まるで真珠玉のようなだけの酒米とする。これを、良質の寒の水でくり返くり返し研ぎすまし、本格的な酒づくりの仕込みへと移っていく。昔から「一廻二酛三造り」といわれいるとおり複雑多岐にわたる工程を頭達杜氏がつと

つこなしていく。杜氏は寒中夜も眠らず、我が子を育てるように精魂をこめ、技の限りを尽くして低温でじっくりくりあげる。こうして、清酒のアルコール分、旨味を米けから造り出した、手づくりの微妙精緻な煌を誕生させたのです。芳醇なこく、口あたりの爽やかさ、喉ごしのよさ、まさに清酒の芸術品、この稀なる清酒「煌」を、日本酒をこなく愛するみなさまにじっくりと味わいつくしていただきたい。

煌 金陵
超特撰

税込
標準価格 10,800円 1.8L
5,400円 720ml

ラベル右下に記しております番号は、一本一本責任をもって製造いたしました品質の証し。ご入手いただいた貴方さまだけの番号です。

西野金陵株式会社 香川県仲多度郡琴平町六三三 電話(〇八七)七三三三 四三三三
未成年者の飲酒は法律で禁じられています。妊娠中や授乳期の飲酒は気をつけましょう。

酒林

SAKABAYASHI

隨筆特集



第95号

涸木

SAKABAYASHI

随筆特集

赤紙がきたら	高橋和島	4
ほろ酔い詩歌紀行 — 四方赤良	日高昭二	6
コックローチ（ゴキブリ）三億年にわたる繁栄	杉本忠夫	8
教員室	内野潤子	10
寺社との縁	志村有弘	12
鴨の川原に秋が来た	片岡義男	14
忘れえぬ詩人と、その詩論	宮地智子	16
絵と文 Ⅲ トリカブト	中西美子	18
ノーベル文学賞はどのようにして決まるのか	池井優	20



絵と文

矢切の渡し (下)

関八州夢幻譚

池田 一貴 …… 37

型染の型紙とジャポニズム

さかもと ふさ …… 36

戊戌元旦

山西 無聞 …… 34

ヤマガラがやってくる

宮本 富夫 …… 32

戌・午・辰

山本 千明 …… 30

ほろ酔い話

永岡 慶之助 …… 28

絵と文

初日の出

佐川 毅彦 …… 26

人間の真景

志村 栄至 …… 23

表紙・グラビア …… 瓦せんべい

赤紙がきたら

高橋和島

(作家・郷土史家)



現在の日本で、赤紙がきたらどうしようという気持ちになる人達が少なからずいることをご存知でしょうか。

年配の方はすぐに、あのことかと苦笑するはずです。そう、赤紙といっても、戦前の軍隊への徴兵通知ではなく、都道府県の公安委員会からくるあの「認知機能検査結果通知書」のことです。

現行の自動車運転免許制度（平成

二十九年三月施行改正道交法）では、

七十五歳以上の高齢者が免許更新をするには「認知機能検査」を受けた

後「高齢者講習」を受ける必要があります。機能検査で四十九点未満なら赤紙、四十九点以上七十六点未満なら黄紙、七十六点以上なら青紙の通知書が郵送されてきますが、赤紙は判断力記憶力に問題ありという評価で医師の診断を受けねばなりません。

今年（平成三十年）の一月末が免許更新期限である高齢者のわたしはつい最近、この「認知機能検査」を受け、以下の如く冷や汗をかいたばかりです。

——昨年九月末、指定受付開始時間三十分前の午後一時、県の運転免許交付更新センターに行きました。早過ぎたかなと思っていたのに、わたしが最後の受付。硬い表情のご同輩たちがすでに検査会場の席に着いていました。老人は何をするにも気が急きますから、こうなるのです。

検査開始直前、トイレに行くなら今のうちですと係官が念を押すと、半数近くが席を立ちました。わたしも続きます。老人はトイレが近い。まして緊張しているから余計です。

開始の合図で配られた用紙に名前、生年月日、住所、電話番号などを記入しました。回答用紙ですから、当たり前じゃないかと思うでしょうが、実は、これも認知機能検査の一部で、自分の名前や住所を正確に書けない人もいます。なお、当日の日付と時

刻の記入欄がありますが、これもまた検査問題の一部なのです。

以上を書き終えた老人を待ち受けているのが、この検査の肝心部分である判断力記憶力を問う問題です。

まず係官が「以下の品物を憶えてください」と言つて、われわれが日常目にする衣服、家具、家電製品、台所用品、乗り物などのイラストを四点ずつ収めたスライドを次々に四回映します。つまり合計十六点のイラストが映し出されるわけです。

大した検査じゃないように思うでしょうが、老人にとっては決してそうではありません。それもイラストを見た直後に答えるならまだしも楽でしょうが、テスト問題というものはみな難易の違いはあっても簡単に点を取らせまいとする工夫をしています。ここでは、A四サイズ用の紙一頁にびっしり記載された数列から、三個の数字（例えば3、7、8）をチェックさせる問題が挟まれ、覚えたイラストの中身をいったん忘れさせる落とし穴が仕組ま

れています。

このため、わたしの場合、数字チェック問題後の回答ではスライドの品物の六割程度しか思い出せませんでした。

これはまずいぞと思っていると、衣服、家具、事務用品、履き物、食べ物……という具合に、ヒントとして品物の分類名が記載された回答欄が次に用意され、覚えたはずの品物を思い出すチャンスがもう一度与えられます。しかし、それでもわたしが回答できたのは十六点中十三点でした。

もの忘れがひどくなっているのを認めざるをえない状態にあります。検査結果をどう考えたらいいのか。大いに不安でした。

最近のことですが、ある法事の酒席で隣り合った老人から「〇〇はおもしろいですね」と言われました。〇〇はどこかで聞いたような人名でした。てっきり親戚知人の誰かに違いはないと考え、生返事でごまかそうとすると、相手はさらに〇〇について話そうとし

ます。面倒になったのでこう応じました。

「あの、わたしは〇〇さんとはあまりお付き合いがありませんので……」

「はん？」

一瞬目を剥いた相手の口から出た言葉に、わたしは愕然となり、しどろもどろになって弁解にならぬ弁解をしました。〇〇は昨年六月発刊した拙著「徳川宗春」（光文社時代小説文庫）の主要登場人物の一人だったので。二十一年前に出したハードカバーの文庫本化とはいえ、八代將軍吉宗時代の尾張名古屋藩主を取り上げた愛着ある作品です。十分時間をかけて読み返し、若干ながら筆入れもしました。酒が回っていたのは確かですけれど、それにしても考えられない大失態であり、明らかに脳の老化からきたものです。

さて、認知機能検査に話を戻しますと、届いた結果通知書の色は危惧した赤色ではなく、かろうじて青色でした。

ほろ酔い詩歌紀行

—— 四方赤良

日 高 昭 二

(神奈川大学名誉教授)



酒を飲む楽しみ、酒を飲むおかしさ、そして酒がないことの悲しさなど、酒飲みの気分を味わうなら、江戸狂歌の人々とお友達になることであろう。日本古典文学全集（岩波書店）の「狂歌集」に付された濱田儀一郎の注釈を頼りに、ほろ酔い気分を読んでみよう。

江戸の狂歌師といえば、その代表に四方赤良^{よものあから}がいる。四方赤良という名は、江戸泉町の酒屋の銘柄「四方のあか」から取ったという。別の名を、太田蜀山人、大田南畝^{なつみ}といい、多摩に住んだ徒士級の武家の出だという。博学で才知に富み、江戸っ子氣質にあふれた人物で、「同盟」という

狂歌のグループを組織し、天明五年（一七八五）には「徳和歌後万載集」を刊行している。

世の中は色と酒とが敵^{かたみ}なり
どぶぞ敵にめぐりあいたい

酒飲み赤良の面目をあらわす一首で、「敵にめぐりあいたい」など、いちどは言ってみたくなるセリフである。酒飲みは、年中飲みたいが、季節の情緒も合わせて飲むのが身上である。

年の初めに詠める
生酔^{なまよひ}の礼者を見れば大道を
横すじかひに春は来にけり

「生酔」は、通常、少しの酒で酔うことだが、相当に酔っている状態もいう。この場合は後者であろう。「礼者」は年賀に歩く人のこと。大通りをあちらへよろよろ、こちらへよろよろと横切って、それはまるで新春そのものがすじかひにやって来たともいうようである。このとき年賀の「礼者」といえば、おそらく袴と袴の武士であろうが、年始の先々で飲むうちに酔いが回って来たともえて、歩く足取りがおぼつかない。まさに大江戸の正月の風景をみるようで、こちらも良い気分になってくる。われわれの幼少年時代にも、そうした風景をあちこちで見た。

さかづきもさすが女の節供^{せせぐ}とて
も、のあたりに手まづ遮^{さへぎ}る

「さかづきもさす」の「さす」が「さすが女」へとつながっていく。「も、」は桃で「腿」にかかる。その桃の節供で、女たちが白酒を飲んでい

るが、さすがに遠慮がちであるという。

龍田山こぞの枝折は林間に
さけあたたためてしれぬもみぢば

「枝折」は道しるべのために枝を折って目じるしにすること。酒をあたためるに紅葉の葉を焼いたので、枝折が見えなくなったという。

酒飲みには、さまざまな交友が出来る。次には、そうしたやりとりの場面をうかがってみよう。

何がし太守のもとにて江戸大夫河東が扇にかきてつかはしけるその扇の糸竹に雀になんありける
くみかはす銚子のさゝにからまりて酔をすすめの時を江戸節

「江戸節」とは、江戸日本橋の豪商、十寸見河東（ちよつと見かとう）の始めた河東節のことで、江戸を代表する音曲として流行したという。この

歌は、その大夫らと酒盛りした折に、扇のはねの竹に雀が止まっているのを見て歌ったもの。「さゝ」（酒）は竹の縁語、「すすめ」は「雀」にかけてある。

「すすめの時」は酒を飲むに都合のよい夕暮れ時ということであろう。技巧に充ちた歌である。

冬の夜洲崎なる望汰欄にあそびけるに庭におりたちて月をながめ侍るとて

ぼうだらになりて海辺をながむれば
月影さむし宵の口塩

「望汰欄」とは、江戸深川州崎の海岸にあった料亭。その読み「ぼうだら」は大酔すること。「口塩」は料亭などの入り口に据えた盛り塩。足元と月を同時に眺めた景色がじつにいい。

生酔とわらはば笑へ味酒の
みをすててこそうかむ瀬の音

もと大坂にあった「うかむ瀬」という店が江戸の浅草にも出来て、あわび貝の大きな盃で飲ませたという。「味酒の」は「身」の枕詞で、「身を捨ててこそ浮む瀬もあれ」に重ねている。なにせ大盃なので飲みつくせない。だから酔って人に笑われてもしかたがないというのである。

最後に、酒飲み赤良の面目をもういちど確かめておこう。

世の中はさてもせはしき酒のかんちろりの袴きたりぬいだり

「ちろり」は酒の燗をする金属製の器。「袴」は徳利のそれで、酒の燗をするのに忙しいということにかけて、袴を来たり脱いだり忙しいという世の中を風刺したものであろう。風刺といえば、次の歌も忘れられない。

世の中にたえて女のなかりせば
をとこの心のどけからまし

コックローチ（ゴキブリ）三億年にわたる繁栄

杉本 忠 夫

（虎の門病院 内分泌代謝科
非常勤嘱託医）



コックローチ（以下コツ虫と略します）は世界中の家庭の台所や浴室などに、暗くなると出没する嫌われ者のお邪魔虫です。このコツ虫についてふれてみましょう。

コツ虫がこの世へ出現したは非常に古く、約三億年以前の石炭紀後期の地層に化石が多く発見され、それ以前より地球上に現れていたことになりました。したがって、コツ虫は三億年以前の太古より生存し、生きた化石といわれています。

また、その種族は三七〇〇から四五〇〇種類にも上るといわれ、この

ような多種族にわたる繁栄は他の生物にみられません。地球上での営みが永かったためでしょうか。

大多数のコツ虫は森林や野原の朽ちた葉っぱ類をエサとして生活しています。人間社会で言えばゴミ収集車の働きをしていることになるかもしれません。つまり、自然界のリサイクルをして土を浄化再生しているのでしょうか。その多数の種類のコツ虫の中の数十種が人間社会に住み着いたようです。

このうち日本の家庭の台所や浴室に住み着いたコツ虫の名前「ゴキブリ」の由来についてみてみましょう。

日本では明治時代よりゴキブリ、また関西ではアブラムシと呼ばれております。ゴキブリの名前の由来は明治時代にコツ虫が食器を舐める（か噛む）ため「御器ごき嚙かり」と呼ばれておりました。ところが、明治時代に辞書のミスでゴキカブリから「カ」が抜け落ち。以降ゴキブリと呼ばれているようです。アブラムシの名前の由来はその外見からぴったりの名前です。地方ではいろいろな名前で呼ばれております。

ところで、コツ虫はお邪魔虫で通っております。したがって。この点からはコツ虫のお話しは披露宴では相応し

くないかと思われます。

ところが、コツ虫の超長期に互る隆盛ぶりを吉として、ある結婚式の披露宴で、一族郎党が円満で末永く繁栄していくようにと、コツ虫の繁栄を祝いの言葉として述べられた紳士がおられました。

その博識の紳士が、三億年におよぶコツ虫の栄華・繁栄について楽しく話され、万雷の拍手喝采を受けておられたことをよく覚えております。

しかしながら、コツ虫（害虫）は人間社会からは嫌われ者です。何とかこのコツ虫を駆除しようとする、多くの企画・方策がなされてきました。

その中でも特に有名な企画は、一九七一年、ゴキブリホイホイ（捕獲器）です。画期的新製品として発売され、爆発的に売れ行きをのばしました。ワンヒント（アイデア）商品の先駆けといわれております。それ以前は、ゴキブリ団子（ホウ酸団子）などが使用されておりました。

最近では、家庭でコツ虫をダイレク

トに退治する人間には無害なスプレー式の殺虫剤がよく使用されるようになりました。

話が変わりますが、キューバには重量が三五グラム、体長が八センチメートルと巨大なコツ虫がいるそうです。中にはコガネムシのような綺麗な羽をもったコツ虫がいます。その美しさからベットとして飼育され。岡山市でコツ虫の品評会が開催されるそうです。

医療面からみますと、一九世紀、新聞記者であった若きラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が記者としてアメリカで取材旅行中に、アメリカ南部の諸州でコツ虫を破傷風の治療に使われていると報告しています。一方、中国ではコツ虫の粉末とクリームを混ぜ、火傷の治療に、また胃腸炎の治療にコツ虫のシロップを使っていたそうです。

近年、爬虫類などから糖尿病の新薬が開発されております。これから先、人類と進化が異なった生き物からの創

薬が開発されてきております。この次はコツ虫をはじめとして昆虫類から全く新しい薬が開発されてくるかもしれません。

衛生面からみますと、一三〇〇年から一八〇〇年代の間、ヨーロッパ、中東、中国を襲ったペストの爆発的な大流行があり、国民の半数を失うほど甚大な被害が出ました。そのため国家の衰退、滅亡に至るほどでした。この流行にはネズミやのみと共にコツ虫もペスト菌を媒介したとされています。

現在では、コツ虫の脚に付着したサルモネラ菌等食中毒菌が食物・食器などを細菌で汚染することから、飲食店などでは特に注意されています。

コツ虫は人間と同様に空調の整った都会の温暖な環境を絶好の住みかにしています。

人間も生活環境を整えて、三億年以上繁栄し続けているコツ虫に負けないように、心身とも病氣のない健康で平和な生活環境を築いていきたいものです。

教員室



内野潤子

(歌人・エッセイスト)

昭和二十三年女專の国文科を卒業した私は教職の免許証を持つて就活することになった。

先ずは母校の女学校に行くと、教頭先生が「いい処に来た、今うちの学校は足りているが、新宿の新富町にあるS女学園で一人探しているらしいから、すぐ行きなさい」と言われた。私は喜んで、すぐその足でS女学園を訪れた。校長先生にお会いしたら「明日からいらつしやい」と言っ下さった。戦後のことで、この学校も処々手を入れながらの毎日であったが、私は初めて教員室の住人となったのである。

自分が生徒の時は、教員室はとても怖い処で、足をふみ入ると先生たちの目が一瞬集注して、身がすぐむ思いがした。

新米の私は、ベテランのN先生のお隣に場所をいただき、明日は生徒の前で新任のあいさつをすることになった。校庭の壇に上がって何をしゃべったか覚えがない。生徒たちの若々しい目の光に囲まれてただ胸がはずんでいた。

私は一応N先生と一年生の副担任となり、自分の級の生徒の名前を一人ずつ呼び、顔をたしかめた。今の生徒と

ちがって反抗的な子は一人もない。みなはずかしそうに立って「はい」と答えた。

やがてお昼の時間になった。昭和二十三年は、まだ食料事情はそれほど豊かではなくて私は祖母の作ってくれたアルマイトのお弁当には、昨日の夜のフライの残りや漬け物や昆布の佃煮など入っていた。もの書きの父の仕事が少しずつつふえてきて、厨の材料も豊かになり始めた頃だった。外の先生方も、毎日茄子を電熱器で焼いて、やき茄子でご飯をおいしそうに召し上がる方や、さつま芋一本の方や、おすしをそのままお弁当箱に入れ、色の変ったまぐろなど、よくお腹こわされないなあとは私は眺めていた。

上司のN先生は、独身で兄上の家に同居していらしたので、いつも兄嫁の作って下さるお弁当で、じゃが芋とピーマンと鯨のベーコンをいためた丈のお弁当で、先生はさっさと近くの肉やさんからコロケ一つ求め、尚生のきゅうりを三・四枚切って塩をふって

召し上がっていらした。私がお弁当の漬け物を差し上げると「おいしいわね」と喜ばれた。

私が祖母にそのことを話したら祖母は白瓜の漬け物を竹の皮に包み、「これ先生に差し上げなさい」と渡してくれた。N先生は「わあ、おいしそう。家にもって帰って兄嫁とお茶をのむわ」としまわれた。

生徒はどんなお弁当だったか分からない。

ある時、「先生、屋上でアイスクヤンデーみんなで食べてます。先生もいらして下さい」と誘いにきたが、あの固くて長い当時のアイスクヤンデーは好きではなかった。「そうなの、ありがとう」と返事だけして行かなかった。

秋の文化祭が近づいて、私はバザーに売る飴を買いに係りの生徒五・六人つれて、上野の飴横と呼ばれるお菓子の問屋街に仕入れに行った。いろいろな飴や当時には珍しく甘食というパンも求めて帰ってきた。いただいた材料

費は全部使った。

やはりまだ甘い物は貴重品で、開店したらたちまち売れて、「売る物がなくなりました」と生徒がきたので、「あなた達飴横いけますか」ときくと「いけます。大丈夫です」というので、私はその売り上げ全部渡し「甘食私の分残してね」と言うと「わかりました」と生徒はとび出していったのだった。

それも全部売れて「はい先生の分」と生徒は売り上げ金と甘食を私に渡してくれた。

教員になって初めての月給日、事務の女性が一人一人の机の上に袋をおいてゆく。

一番薄くても、給料を手にするのは、こんなに嬉しいものかと思った。

私はその日の帰り学校の近くの肉屋さんに行きフランクフルトを二本買った。

父へのお土産である。父はフランクフルトが特別好物ではなかったけれど、喜んでくれた。それは在職中毎回

のことで、それを買おうと私の給料は半以下になるのだった。

バザーで売れ残った、当時には珍しい朱いセーターがあった。高価なため残ったらしい。

それが欲しいと思って母に話すと、「いいよ、これでお買いなさい」とすぐ代金をくれたので、それは私の大事なセーターになった。

軽くて温かくて長い間私を包んでくれた思い出のセーターとなった。

昭和二十年からつきあっていた夫が当時東京医大に務めていて、学校も近かったから、いつも新宿の紀の国屋書店で待ち合わせた。

二人でやっと開いたばかりの中村やで、コーヒート月餅を食べたのがなつかしい。

結婚がきまって、S女学園を退職することになり、住所が川崎になるのでとても続けられず、心残しつ、退職した。S女学園は私の母校より自由で明るい校風であったと今でも楽しかった教員生活を振り返るのである。

寺社との縁

志^し村^{むら}有^く弘^{ひろ}

(相模女子大学名誉教授)



少年時代、近くのお寺の境内で野球をして遊んでいた。もう一つの遊び場は川向こうにあった墓地。幼い私には、墓地が死者の家であるなど、知る由もなかった。冬、近くの山でスキー遊びに興じていた。そこには丸山寺という寺もあり、少年の心にも何か畏怖すべきものを感じていただけれど、私たちには、冬はスキー遊びの場、夏は

〈探検〉と称して自然の中で遊ぶことのできる楽しい場所であった。

私は神仏説話を好むせいか、寺や神社にとりわけ心惹かれる。京都や奈良など歴史の古い場所でなくても、お寺や神社を見かけると、ここには興味深い歴史や伝説があるのではないか、と思ひ、引き寄せられるように入って行く。

寺社巡りで、教えられることも多い。戦国期の武将中川清秀が眠る梅林寺（茨木市）を訪ねたとき、寺僧に「中川公のお墓を見せて下さい」と願った。すると、僧は「墓は見るものではありません。拝むものです」と注意してくれた。私はその通りだと思ひ、ただちに「中川公のお墓を拝ませて下さい」と言い直し、頭を下げた。僧は微笑みながら、「寺の裏にありません、どうぞ」と許してくれた。僧の言葉は、私にとって大きな教訓となった。初めて尾道の千光寺を訪れたとき、住職（当時）の多田義信氏と名刺を交換し、爾来、親しくおつきあひをしていただいている。「一里聞こえて二里響く」という、有名な千光寺の鐘は、大晦日、除夜の鐘でときおりテレビで紹介される。後に、寺に祀られている役行者像を拝みに訪れたときには、夫人が手製の羊羹を用意してくれていた。長野市松代町の浄福寺（禅宗）には、十五歳で死去した清水澄子の墓がある。澄子は、詩・短歌・戯曲など

を書き残して、後に刊行された『さ、やき』は、大正から昭和初期にかけてベストセラーとなった。初めて浄福寺に電話したとき、住職夫人から「お参りにいらつしやい」と言われ、募参をしたのだが、月岡住職御夫妻は穏やかで心優しく、後々まで親しく交流していただいた。訪ねることを伝えておくと、夫人が野沢菜の饅頭を作って待っていてくれたこともあった。

平成二十八年九月、北海道士別の大阿寺（真言宗）を訪ねた。かつて、士別で文学に精進しながら、昭和十一年、二十一歳の若さで病没した村山芳子を調べるためである。大阿寺は芳子の菩提寺。大阿寺の眞光昌雄・弥生御夫妻はまことに親切で、「芳子の甥にあたる村山利一氏（士別在住）」のころへ案内しよう」と言ってくれた。人見知りの激しい私は、そのときは伏して辞退した。やがて『村山芳子の人生と文学』という小さな本を作ることができた。その背後には、大阿寺御夫妻、村山利一氏・柏谷由美子さん（旭

川市在住）の御協力があり、資料面では繰り返しお願いする私の要望に全て対応し続けてくれた士別図書館の存在が大きかった。そのころ、亡き村山芳子が良い方向に導いてくれていのではないかと、思ったりもした。

それから一年後の九月（平成二十九年）、私は士別を訪れ、芳子さんの墓前に作った本を供え、そのあと、村山利一氏の案内で、立野茂氏の墓にも線香を手向けることができた。立野氏（芳子の姉の子）とは、『村山芳子の日記』をまとめ、〈文人村山芳子〉の名を後世に伝える大きな役割を果たした人である。立野氏の御息女柏谷由美子さんにも芳子関連の写真など、お世話になった。小著『村山芳子の人生と文学』は、こうした人たちの協力・支えによって作ることができた。

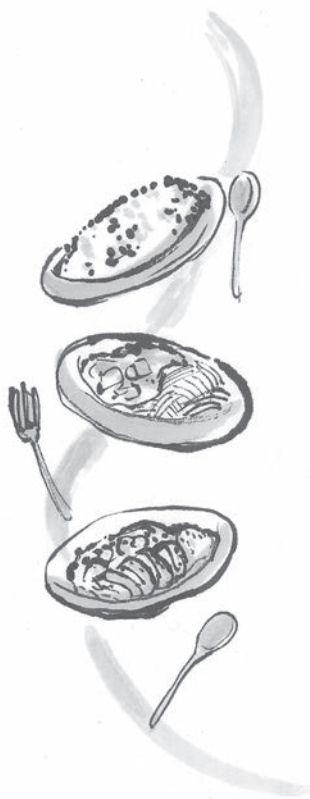
私の過去半生を振り返ってみると、寺や神社にはさまざまな形で助けられてきた。父母・姉夫婦が眠る龍興寺（札幌）には毎年訪れ、短い時間であるが、寺僧や事務職の人と親しく言

葉を交わす。北海道深川市の教証寺には、昔、九條武子が訪れており、お寺の女性が当時のことを懇切丁寧に教えて下さった。大阪の阿部王子神社の長谷川靖高氏（前宮司）には、安倍晴明調査のおりからひとかたならぬお世話になった。阿部王子神社の摂社に安倍晴明神社があり、ここは晴明誕生伝承地でもある。そして、埼玉県秩父市の今宮神社の塩谷治子さん（前宮司）一家には役行者調査のことでお世話になった。また、本に永山武四郎の歌碑が上川神社（旭川市神楽岡）にあると記されているのを見て、九月十九日（平成二十九年）、突然、訪ねたにもかかわらず、宮司さんをはじめ総出で社殿内や境内を説明・案内して下さいた優しさを忘れることができない。

そうして、「酒林」第九十四号（平成二十九年九月）を大阿寺に贈ったところ、「香川県より来客があり、金陵さんのお話を聞くことができました。御縁を感じます」と書いたメールを送ってくれた。

鴨の川原に秋が来た

片岡義男
(作家)



ドライカレー。スパゲッティ・カレー。厚切りカツカレー。この三種類のカレー料理を、三人の人がそれぞれどれかひとつを注文する。おなじものを注文してはいけない。三つの料理がテーブルに運ばれた来たなら、どの人も好きなものから食べていい。ただし三分の一食べたなら、隣の人に、あるいはテーブルの向こうにいる人に、残りをまわす。このように三分の一ずつ食べてはまわしていくと、三種類のカレー料理を三人で賞味することが出来

るではないか。
というのが僕の提案だった。その提案に、男女各一名ずつのふたりが、全面的に賛成した。賛成したからには実行するほかない。だから僕たち三人は、八月二十五日に東京から新幹線に乗り、京都までいった。五月におなじメンバーで京都へいったとき、この三種類のカレー料理をなぜかその店で食べず、したがって三人が一緒に、はつきりと心残りを覚えていたからだ。
八月二十五日の京都は晴れて気温が

高く、まだ夏だと言っている状態だった。京都駅から僕たちはタクシーでその店に向かった。五月の午後に訪れたときとなんら変わることもなく、その店は営業していた。ドライカレー。スパゲッティ・カレー。厚切りカツカレー。この三種類を僕たちは注文した。五月にはなぜか食べそこなった三種類のカレー料理を、僕たちは堪能した。食べているあいだ、僕たち三人の誰もが、やや無口だった。食べるのに夢中だったからだ。男たちふたりは、

うまい、と言い、女性はい、おいしい、
と言った。食べているあいだ、僕たち
が使った言葉は、それだけだった。

三種のカレー料理のあと、店を出た
僕たちはタクシーに乗り、河原町通り
を途中まで下がった。途中までとは、
四条へ出るまでのどこか途中、という
ほどの意味だ。河原町通りから東へ向
かい、この建物は一九二七年以来のも
のだという、私立小学校の校舎に入
り、カフェが営業している職員室で、
紙カップのコーヒーを飲んだ。

一八六九年に開校し、一九九三年に
閉校したその小学校のもと職員室は、
その空間のありかたやテーブル、そし
てコーヒーの出来ばえなどとともに、
食べたばかりのカレー料理に関する反
省の場として、最適だった。カレー料
理に関するさまざまな意見が飛び交っ
た。

そのあと新京極と寺町京極を横断
し、僕たちは錦市場へいった。市場は
外国からの観光客で充滿していた。僕
たちの誰もが、出し巻き卵と丹波の焼

き栗を買った。おみやげだ。二種類だ
からあいだに「と」の字がひとつ入
る。じつはこの「と」の字は、『赤と
黒』『戦争と平和』『老人と海』のよう

に、小説の題名のなかの文字として、
独特の位置を獲得している。「出し巻
き卵と丹波の焼き栗にも、との字はあ
りますよ。題名にどうですか」と、同
行の男性が言った。十一月のなかばに
も僕たちは京都へいき、そのときには
は、卵サンドと柚子味噌を買った。小
説の題名としては、こちらのほうがい
い、と僕は断定する。『卵サンドと柚
子味噌』という題名の短編小説を、僕
はかならず書く。

錦市場を西へ歩ききり、高倉通りに
出た僕たちは、そこで立ちどまり、相
談をした。相談はすぐにまとまった。
いま自分たちがいる場所からもっとも
近い喫茶店に入る。まとまった相談と
は、このようなことだった。

コーヒーとともに過ごしたひととき
のあと、僕たちはタクシーに乗り、夕
食の店へ向かった。おでんの店だ。南

座から川沿いに少しだけ下がったところ
にある店へ、開店と同時に入った。
店の前で開店を待っていた人たちが何
人かいた。

おでんはたいそう美味だった。これ
を今回の夕食にして正解だった、と僕
たちは喜び合った。ちょうどなかば
で、湯葉を食べた。おなじく湯葉を食
べていた女性の客が、どこの湯葉です
か、と訊いた。御所南の湯葉半のもし
です、と店の人は答えた。

そうだ、湯葉だ、次に来たときには
御所南で過ごし、早い時間に湯葉を買
おう、と僕たちは語り合った。次の課
題がひとつ、たちまち出来た。この湯
葉を食べているとき、京都の夏は終
わって秋になった、と僕はいまでも本
気で思っている。僕たちがカウンター
で熱い湯葉を食べていたそのとき、鴨
川の水面を、そして川原を、その年の
京都にとつての最初の秋風が、気づく
人のほとんどいないままに、優しく
そっと、しかし確実に、吹き抜けたの
だ。

忘れえぬ詩人と、その詩論

宮地智子

(詩人)



学校では教わることのなかった、近・現代史について、改めて自分なりに学んでみると自身の思い込みを糾さねばならないことが余りにたくさんあつて、その度に愕然とする。そんな時に、口をついて出てくる短い詩がある。詩というより警句(アフォリズム)と云つてもいい。

聞きそびれた昨日の言葉は
夕空にかかる虹のように美しい
しかしその虹を地上にひきおろして
みると
それは一条の縄でしかない

作者は嵯峨信之。若い頃、萩原朔太郎に傾倒し、詩作を始めるものの、草創期の「文藝春秋」の名編集者として、その仕事に専念していたため、詩人としての出発は遅かった。オノ詩集出版は五十五才の時である。

けれど、大草実という名前で活躍していた編集者としての経験は、その詩作の奥深い所で繋がっているのであり、それは目に見えない形であつたり、時に見える形であつたりする。
栗原滯子著『黄金の砂の舞い―嵯峨さんに聞く』によると、昭和二十一

年(一九四六)四十四才の時に「敗戦国の自由は詩のなかにしかない」という思いが深く、再び詩を書き始める。とあり、その頃、「詩学」の編集に携わるようになるのである。それは平成九年(一九九七)九十五才で天寿を全うするまでの半世紀に渉るのである。
昨年の平成二十九年(二〇一七)は、没後二十年、私が、生涯でたった一人、「先生」と呼ばずにはいられない、その嵯峨信之の、魂が甦える思いがするのである。

詩誌「詩学」は、戦後の詩壇の公器として多くの詩人(谷川俊太郎・吉野弘・川崎洋・茨木のり子…)を輩出したのみならず、評論家江藤淳は、あるエッセイのなかで、次のように語っている。

「戦後、鬱屈した心を抱え、街角の書店で平積みになった「詩学」を手にしたときの感動は忘れることができない。この時の出会いがなかったら、自分は今の仕事をしていなかったかも知れない」

昭和七年（一九三二）「文藝春秋」新年号の「社中綴方」に、大草実は次のような文章を載せている。

なめくじは勢いっぱい歩き廻る。しかし、舌で歩くことしか出来ない……。世の多くの人の姿をここに見、これは考ふべきことだと、僕は考へた。

このなめくじの詩（あるいはアフォリズム）は、二十七年後の昭和三十四年の「詩学」の編集後記には、今度は嵯峨信之の名前で次のような扱われ方をしている。

なめくじは匍いまわる
舌のように匍いまわる
という二行の詩を次のように書き直すと、批評性に加わる。
なめくじはせいっぱい匍いまわる
しかし舌で歩くことしか出来ない……
この批評性こそ、詩人の内部の批評的経験に、創造的意思が加わったものであり、リルケの云う、「詩は経

験である」という言葉は、このように解釈される。

したがって、詩は青春の文学でも、老年の文学でもない。超時間的な批評の文学であり、賭の文学なのである。

現在、さまざまな詩が書かれていく。けれど私達に詩論は確立しているだろうか。そんなものはいらない、と詩人たちは云うだろうか。私は詩論を渴望している。

「詩学」の投稿欄は贅沢だった。選評会での選考過程も詳細に掲載され、新人養成に力を入れていることが読者に伝わった。それに他の詩誌と違って、「詩学」に載る詩は、わかり易い詩が多かったから、難解な詩が、もてはやされた当時、私は「詩学」にしか投稿する気がしなかったものだ。

昭和五十年（一九七五）の「詩学」の後記は何とも痛快である。

詩の主題や本質内容とは関りなく、

ただひたすらショッキングな言葉をつらねて、まるでバナナの叩き売りのごとく並べていた詩も昨今はどうやら一般に厭きられ下火になりつつあるようだ。ともあれ詩の難解なことは仕方ない。言葉の混乱や自己増殖になるのは、現代の混沌たる世情の反映だから止むを得ない。などと云って、セックスと不信と破壊の申し子みたいな詩人たちの作品が多く未熟な詩青年の歓迎を受けていたことは若干の意味はあるとしても所詮は一時期の仇花にすぎなかった。

また、ある時は、こうも言う。「言葉はそこに在る。誰にも見えるところに。」このような含蓄のある言葉は、もはやひとつの作品である。私の語んじているもうひとつの短い詩は私に深い慰安を与えてくれる。

不幸よ

わが偉大な休息の鳥
その空を飛んでいる信天翁あほうどりよ